

## 説教 『キリストの十字架のほか、誇るものあらざれ』

小河信一 牧師

### ガラテヤの信徒への手紙 6章11節～18節

<sup>11</sup> このとおり、わたしは今こんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています。  
<sup>12</sup> 肉において人からよく思われたがっている者たちが、ただキリストの十字架のゆえに迫害されたくないばかりに、あなたがたに無理やり割礼を受けさせようとしています。<sup>13</sup> 割礼を受けている者自身、実は律法を守っていませんが、あなたがたの肉について誇りたいために、あなたがたにも割礼を望んでいます。<sup>14</sup> しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほか、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。<sup>15</sup> 割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。<sup>16</sup> このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。

<sup>17</sup> これからは、だれもわたしを煩わさないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に受けているのです。

<sup>18</sup> 兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アーメン。

教会標語「聖書を基とし信条に立つ教会形成」を掲げていた2011年12月11日より、月一回の割りりで、ガラテヤの信徒への手紙の講解説教を始めました。そして、今回、2013年4月21日、ついに「結びの言葉」に至りました。テサロニケの信徒への手紙 一 やコリントの信徒への手紙 二 を見ても分かるように、パウロの手紙には、まことに充実した内容の「結びの言葉」が書き残されています。

パウロは実際、配慮の行き届く、練達の伝道牧会者として、このわずか八節を書き上げています。

キリスト者の手紙の終わりで大切なことは、要約して言えば――

①訴えようとした使信を明瞭にすること。

そのために、要領よく内容を反復・復誦することです。

②神にゆだねること。

<sup>せん</sup>煎じ詰めれば、主にあって自分の使命（文書による伝道牧会）を全うした者として、そこに祈りがあるかどうかです。

人間的に、あるいは文章的に不十分だと感じたとしても、<sup>こうこ</sup>後顧の憂えなく、聖霊の導きを信じきるのです。

これら二つの要件が満たされているかどうか、に注目しながら、ガラテヤの信徒への手紙の結びを読んでいきましょう。

パウロがその冒頭に「わたしは今こんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています」（ガラテヤ 6:11）と述べている中には、ガラテヤの信徒たちが<sup>ゆる</sup>気を緩めずに読み通してほしいという願いと親しみが込められています。

中心聖句は、ずばり、次の個所です。

ガラテヤの信徒への手紙 6:14——

しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。

「しかし、このわたしには」、もちろんあなたたちにも！——パウロは「大きな字で」、ガラテヤの信徒への手紙を要約しました。身を挺して語りかける「そうではなく、しかし」には迫力があります。

この節のパウロの言葉は、ガラテヤの信徒への手紙全体から観て、当然そこに合わせられるべき焦点を射抜いています（手紙の結びの要件①を充足しています）。

パウロは、この節の前半では、神の最大の恵みの業を告白し、後半では、この世にあって神の国をめざす人の姿を描いています。「霊に導かれて生きている」信仰者（ガラテヤ 6:1）の心構えが、天と地の全体にわたり、つまり、神と人との出来事を対して貫かれています。

さてここで、一つ質問ですが、「主イエス・キリストの十字架のほかに、（別のものを）誇る」という決してあってはならないことを、実際そのように禁じるには、どうすればよいのでしょうか？

「断じてあってはならない」ことだからといって、そこで、力み返った「自分」がしゃしゃり出は元も子もありません。英語の聖書から、先のガラテヤ 6:14 の英訳を引用しましょう。

But God forbid that I should boast except in the cross of our Lord Jesus Christ, by whom the world has been crucified to me, and I to the world. 【NKJV】

「…ということは断じてない。…とはとんでもない」は、英語では、God forbid (that) ... の構文を使います (forbid = 「禁じる」。仮定法に由来するので forbids とはなりません)。「断じてあってはならない」と言われて、一抹の不安から、「そうならないように」人間が頑張るのではありません。それを禁じてくださる神にお任せするのです。

「神が禁じたもう」——その際、神は忍耐をもって人間の背きに向き合われます。時が満ちて (ガラテヤ4:4)、神は人間を反逆から悔い改めへと導くために、御子、イエス・キリストをこの世に遣わされました。人間は、主イエス・キリストの十字架と復活による救済を通して、的外れな罪を禁じたもう神の御心を知るようになったのです。

中心聖句の後半には、主の十字架によって神の御心を知った者の姿が打ち出されています。神の恵みの業によって、私たちが「新しく創造されること」 (ガラテヤ 6:15) が大切なのです。

ガラテヤの信徒への手紙 6:14 後半——

この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。

「はりつけにされている」、すなわち、完了形で「はりつけにされてしまっている」 (has been crucified to me) のです (他にガラテヤ 2:19 参照)。私たちが洗礼の時、その恵みにあずかった主の十字架の出来事は、私たちの人生の決定的基盤となった、と同時に、今現在も、私たちに対し、十字架の救いの力は働き続けています。まさに、私たちは「死んで、また生きる (よみがえる)」日々の連続を過ごしているのです。

主の十字架の出来事が、私たちの人生に貫かれるとき、私たちはそれに伴う〈世の死〉、そして、世に対する〈私の死〉を経験します。それは、死んで終わり、ではなく、「新しく創造される」ためです。

そのことはもちろん、この世の生活が私たちにとって無駄であるというわけではありません。主にある自由と秩序に包まれて、〈キリスト教倫理に基づく生活〉 (ガラテヤ 5:13-6:10) が進められていきます。教会の中であって、愛によって互いに仕え合い、その幸いを十字架の御旗の下に、この世に告げ広める伝道へと押し出されていくのです。

パウロは、すべてのことの焦点を成す「十字架のみ」 (ガラテヤ 3:1) がぼやけないように、信仰上の子供たちであるガラテヤ人に、陥りやすい罠を解説しています。

ガラテヤの信徒への手紙 6:12——

肉において人からよく思われたがっている者たちが、ただキリストの十字架のゆえに迫害されたくないばかりに、あなたがたに無理やり割礼を受けさせようとしています。

「十字架のみ」の信仰がいつの間にか、「十字架プラス<sup>アルファ</sup>α」の偽りの信仰に転落しないように、三つの注意点が挙げられています。

- ①「肉において人からよく思われたがっている」
- ②「十字架のゆえに迫害されたくない」
- ③「無理やり割礼を受けさせようとしています」

これら三点の中に、「十字架のみ」の信仰を揺さ振る人間の邪悪さとりっぱさが摘出されています。直接的には、割礼や律法にからむユダヤ人独特の論争が前面に出ていますが、それらは、異邦人またはキリスト者一般にも当てはまるやっかいな問題です。

#### ①「肉において人からよく思われたがっている」

次節にも、同じ主旨のことが、「実は律法を守っていませんが、あなたがたの肉について誇りたいために」（ガラテヤ 6:13）と繰り返されています。

「よく思われたがっている」とは、見えを飾る、あるいは、外見を良くする、ということです。結局、主なる神の前に、自分が、また、世が、完全に「はりつけにされていない」、つまり、「死にきっていない」のです。「もろとも十字架につけてしまった」はずの「肉・欲情・欲望」（ガラテヤ 5:24）が、勢力を回復した炭火のように燃え盛っています。

#### ②「十字架のゆえに迫害されたくない」

十字架は掲げるが、迫害は御免こうむりたい、という生半可な生き方です。

私たち日本人にとって、迫害を避けることは喫緊の課題ではないかもしれませんが、「迫害」を「迷惑」や「面倒」（を掛けられること）に置き換えれば、他人事ではなくなるでしょう。片や、この人の「迷惑」には熱心に関わり、片や、あの人の「面倒」はなおざりにするとすれば、人を偏り見ることとなります。

#### ③「無理やり割礼を受けさせようとしています」

「無理やり」は、「キリストはわたしたちを自由の身にしてくださった」こと（ガラテヤ 5:1）に対する反則です。人を罪の縄目から解放した十字架の福音は、「自分の」主義主張を「無理やり」押し付けるこの世の悪弊を打ち砕きました。強制する人の魂からは、主にある平安が失せています。

「十字架のみ」へ混入されるパン種（マタイ 16:6）が、〈世〉と〈私 / 私たち〉の間、人間の邪悪さにも、また人間のりっぱさにも、あらゆるところに潜んでいます。

このように、パウロは、ガラテヤ教会の信徒間の問題を摘出して見せた後、祈りました。

ガラテヤの信徒への手紙 6:16——

このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。

人の心を千々に乱れさせ増長させるパン種がはびこっていればこそ、一つのこと、一つの「原理」（カノン 単数形 〔英語〕 canon）に、すなわち、「十字架のみ」に集中できるようにと、祈りを捧げたのです。

パウロは、「どうしようもないガラテヤの教会と信徒」と、自ら思い悩みつつも、神の「憐れみ」は尽き果てない、やがて、荒れ狂う海に「平安」なる<sup>な</sup><sub>な</sub>屈ぎが来るであろう、という希望を失いませんでした。

ガラテヤの信徒への手紙 6:17——

これからは、だれもわたしを煩わさないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に受けているのです。

「今後一切、誰も、この私にもろもろの苦勞を負わせないでくれ」（私訳）——

この節について、一見、文脈から逸れたパウロの奇妙な発言と評されることがあります。しかし、神にすべてをゆだねて祈ったパウロからすれば、決して唐突でも意外でもなかったでしょう。

ここに記されているのは、自分は今からは「思い患いの外に立つ」という宣言です（飯島正久）。ここでは、「互いの重荷を担いなさい」（ガラテヤ 6:2）という「重荷」とは異なる、この世の「煩い」としての「思い患い・思い悩み」を指しています（マタイ 6:25）。言い換えれば、「私はもう思い患わない」、ただ、身に受けた「イエスの焼き印」、すなわち、身に帯びた主の十字架の傷痕<sup>きずあと</sup>を背負って歩むと、パウロは宣言しています。自ら、「十字架のみ」「十字架の重荷のみ」「主につながる轡のみ」（マタイ 11:29-30）を確認しているとも言えましょう。

最初に、手紙の結びの要件②として、「神にゆだねること」を挙げました。前後の厳粛な祈禱（ガラテヤ 6:16）と祝禱（同上 6:18）の狭間で、ぶっきらぼうに「煩いは、もうこりこり」と心情を吐露しているようにも見えます。

振り返れば、パウロは、ガラテヤの信徒たち以上に、教会内の諸問題、また根本問題である「十字架プラス<sup>アルファ</sup>α」の偽りの信仰に思い悩まされてきました。そして、パウロは今、信徒たちに対し、思い患いから解き放たれて、聖霊の力で「十字架のみ」に専心するようにと願っています。

そこで、大事なことは、自らが引くことです。具体的には、自分が助言したこと、また、手紙をしたためたことを、これ見よがしに功績にしないことです。手紙の読み手自らが歩みを再開し、神を信じ、隣人を愛することを、神にゆだねるのです。その道程において、神が、主イエス・キリストが、そして聖霊が介入されることでしょう。必要ならば神が、とりなし手として、再度パウロを用いられることでしょう。

ガラテヤの信徒への手紙 6:18——

兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アーメン。

最後の最後に、パウロは、主にある「兄弟たち」の霊性（プネウマ）に訴えかけます。それは、繰り返し、聖霊の導きにあずかることを勧告したガラテヤの信徒への手紙にふさわしいことでした。聖霊が私たちに知らせ続けているのは、キリストの恵みが主の十字架によってあらわされたということです。